

小学生・中学生・高校生の作文分析から「自分くずし・自分づくり」を考える

—— 中高一貫カリキュラム構成の基礎的研究 ——

筑波大学附属駒場中・高等学校  
井上正允

# 小学生・中学生・高校生の作文分析から「自分くずし・自分づくり」を考える

## —— 中高一貫カリキュラム構成の基礎的研究 ——

筑波大学附属駒場中・高等学校  
井上正允

### 要旨

中学・高校の指導要領やカリキュラムをどう作るかの一つの焦点は、教科内容や教科の時間数をどう決めるかである。2002年（高校は、2003年）実施の指導要領（「内容の3割削減」「ゆとり教育」「総合的な学習の時間」…）をめぐり、「学力低下」論争が引き起こされたが、この議論でも、理科や数学の時間数や内容の削減によって予想されるこれまで以上の「学力低下」に対して、現場教師や教育学者だけでなく数学者や科学者・精神科医・心理学者が発言し、マスコミが大きく取り上げることによって未曾有の大論争になった。

その議論では、現在の中学生や高校生が学校の中でいかに過ごし、何を学び、どう関係をつくり、アイデンティティ形成に取り組んでいるのかについての考察はほとんど見られない。本稿では、Wスクール生活を経て国立附属の中学校に入学した子どもの6年間を、生徒が綴った作文を通して追ってみたい。彼らの「自分くずし・自分づくり」がどのように進行するのかを追いかけながら、分析・考察を試みた。中高のカリキュラム構成のベースに「子どもたちの成長・発達の間を把握する」必要があるとの判断があり、その上で中高一貫カリキュラムを構想したいと考えたからである。

キーワード：「自分くずし・自分づくり」、Wスクール、塾通いの低年齢化、受験競争、点数主義、効率主義、反抗と依存、親子関係の作り直し、中高一貫カリキュラム

### 問題の所在

「一般に子どもは、青年期のおとずれとともに、自分のなかになにか新しい自分が生まれつつあるのを感じる。そのために、子どもはこれまでの自分、すなわち、幼少年期の自分に疑いをもちはじめ、これをこわしにかかる。しかし、かれらにはこれまでの自分にかわる別の新しい自分が確固としてあるわけではない。それはまだどんなものかわからない。だから、かれらは仮の自分を構えることでもって、これまでの自分と対抗しつつ、青年期に乗りだしていく。そのとき仮の自分とする行動が反抗であったり、逸脱であったり、内閉であったりする。かれらにとっては、これまでの自分のこわしてくれるものでさえあれば、どんなものでも仮の自分として役立つわけである。ともかく、青年は仮の自分を構えることでもって、親の世界から訣別し、青年期遍歴に旅立つのである。」<sup>(1)</sup> 竹内常一が『子どもの自分くずし、その後』の冒頭で記した一文

である。

首都圏では、少子化時代を迎え小学生や中学生の数が激減しているにもかかわらず私立・国立中学校受験者数は増え続けている。<sup>(2)</sup> 塾通いの低年齢化・深夜の塾通い・徹底した競争原理or信仰（小学校の3～4年生から、2～3週間毎の塾内テストの成績序列によって、教室や座席が決まる）などによって鍛えられた小学生が、筆者の勤務校（附属駒場中学校のここ数年の受験倍率は、6～8倍である）の受験に殺到する。

6～8倍の難関を突破してきた「勝ち組」は、第三者からはなかなか見えにくい問題を抱えているケースが少なくない。「小学校の授業に期待感が持てずに完全に見切りをつけている生徒」「塾通いによる放課後の生活の急変から、親しかった友達が離れていく経験を持つ」「競争に勝ち続けて、今の結構楽しく幸せな自分があるという実感」「テストの点数の序列（デキル・デキナイ）によって、人間の価値付けをする傾向」「能力が高くさまざまな知識をもっていることによって、教室

---

“Scrap-and-build” — how a student has reshaped his inner self through highschool life : an analysis based on three compositions

の周囲の児童のみならず担任の教師からも煙たがられ、満たされない思いや疎外感を感じ続け、進学塾にしか居場所を見つけることのできなかつた生徒「母子密着が極端である親子（「先生、うちの〇△君は本当に頭良くてかわいいんですから…」と、はばかり言う母親とそれを当然のこととして受け入れている子ども）」「運動をまったくといっていいほどしてこなかつた子ども（バットの握り方・振り方を知らない）」「強烈な自己中心性」「社会力・コミュニケーション能力や自我の未成熟」「総じて、閉じこもりや引きこもりの傾向が強いこと」（筑波大学学校教育部教育相談室と附属が共同で取り組んだメンタルヘルス研究）<sup>(6)</sup>など、さまざまな問題がみてとれる。このあたりの実情については、おそらく、文部科学省も正確にはつかみ切れていないと思う。で、なければ、「エリート形成」の課題は、国民の税金で運営される国立の附属ではなく私立の進学校にまかせておけばいいとの見解は出てこない。<sup>(4)</sup>

本論では、中学受験をめぐる塾や家族の状況およびこうした特異な経験（目黒や世田谷など、本校が隣接する目黒区・世田谷区では5割を超える小学生が私立・国立中を受験するから、東京の山の手地区では決して特異とはいえないのだが…）を積んできた「勝ち組」の中学生（高校生）に対して、本校が彼らの成長のために、どのような学習や行事のカリキュラムや環境を用意し、彼ら（個人や集団）とその親に何を要求していくのか。その過程で、どのような摩擦や葛藤・停滞や後退・逸脱が起こるのか。そして、それらは、生徒一人ひとりの自己形成にとってプラスにはたらくのか、それともマイナスに作用するのか。筆者は、こうした一連の出来事がプラスにはたらくようにサポートすることが教師としての仕事であり、この関門をくぐり抜けることが「自分づくり」の第一歩であると考えている。

この、彼らの「自分くずし・自分づくり」＝アイデンティティ形成の様相について、小学校6年生、中学校3年生、高校3年生の「卒業文集」に掲載された3つ「生き方」観を通して、考察していくこととする。特に、竹内が論じた「仮の自分を構える」ことと、「自分くずし・自分づくり」の2つの転換点（「くずす」と「つくる」という作業にともなう）について論じたい。

#### ひとりの受験生の中学入学前の生活

筑波大学附属駒場中学校に入学してくる生徒たちの「中学受験をめぐる子どもたちの生活」から見ていこう。次に紹介する文章（抜粋）は、筆者の研究会仲間

であるA先生（当時は、S区の小学校勤務）がクラスの卒業論文としてある児童に書かせたものである。（1987）<sup>(6)</sup> 15年前の小学校6年生が綴ったものだが、少子化時代を迎えても、首都圏（東京・神奈川・千葉・埼玉）の中学受験人口のすそ野は確実に広がっており、本校が毎年実施している新入生アンケートの結果や進学塾関係者などの話から考えても、都内の偏差値トップ校をめぐる中学受験や進学塾通いの状況は、15年前とさほど変わってはいない。

#### 「受験勉強とぼく」

小6. T

3年生の三学期、僕は母に連れられて「B進」という塾の入会試験を受けに行きました。先生方の顔を見たときは、スパルタ教育でもさげすまぬ気がしてなりません。先生の内の一人が、母となにやら話している間に、眼鏡をかけた先生が、「試験時間は1時間20分、君は2教科だから、算数・国語、それぞれ40分ずつ、それじゃついてきて」とおっしゃって、教室につれていってくださいました。

祖父から教わった漢字、計算の仕方などをフルに生かして、目の前の時計で50分たったころ、見直しもせずに教師室に持っていきました。

中略

4年生の目標は、まず四進（四谷大塚進学教室）の会員になることでした。僕の通っているB進などの小規模な塾の生徒にテストを受けさせ、塾でついた学力の程度調べるようなところでいわば大きな塾です。勿論B進にも試験はありますが、せいぜい月一回程度で、四進は毎週あるのです。しかも四進で良い成績をとった生徒は、その所属する塾の“看板”になるわけですから、先生が四進の試験に力を入れるのは当然です。

4年生の12月、四進に通っている生徒を三つに分けるテストがありました。“会員”、“準会員”、“外部生”の三つです。そのテストまでは日曜日の昼までは眠れない特訓が続きました。分からない人は分かるまで、その人だけが残されることになっていて、僕も何度か残されたことがあります。先生に「おまえはこんな問題も分かんないのか!? さっき先生が説明したばかりじゃないか」とどなられました。そのときはとなりの友達が話しかけてきたために、聞こえなかったのです。でもそれを「聞こえなかったのもう一度言ってください」という勇気がそのときはなく、それがくやしさに変わってその時から本気で勉強するようになったのです。

その後、そのかいあって、一万三千人余りの中で480位で、また塾の中では3位の成績で会員に合格できました。塾長に、母はうれしそうにお礼を言っていました。

中略

「正会員になった以上、Cをめざしてがんばらなくちゃだめよ。努力すればできるんだから」そのころ母が、よくこんな言葉を言っていた憶えがあります。"C"とは『御三家』と呼ばれる私立中学<sup>(6)</sup>のことです。

中略

5年生になると、一番上のクラスは"5年選抜"という名に変わります。僕はクラス分けテストでは常に10位までの中に入っていましたから、一番上のクラス(一クラスは5~12人)にいました。

順調に進んだ塾生活もつかの間で、5年の三学期の資格検査という試験(この試験で、準会員が正会員になることができ、また正会員はそれ以外のものに落ちてしまうこともある)で、僕は、正会員から準会員に落ちてしまったのです。"5年選抜"クラスの中で、準会員は僕を除くとたった一人になってしまったしまったのです。

母から「もう四進やめたら? 受験はあきらめなさい。それともまだ続けるの?」と聞かれましたが、その時僕は、すぐに返答することができませんでした。それからは、その迷いのおかげで、何となく続けた塾にも全く身が入りませんでした。

塾の担任の先生が「たった一回の試験だけが悪い成績だったんじゃないか。他の試験の時はいい点数をとっているのに。それに、ここで辞めたら今までの努力は何になる」と言いました。僕自身も、早めにけじめをつけなければ金と時間のムダだと思っていましたから、結局やめずに続けることにしたのです。

決心がついてからまもなく、今まで教えていただいていた先生4人の内、3人が変わってしまったのです。今度の先生にはすぐに慣れました。今では(前の先生が聞いたら申し訳ないけれども)先生が変わって良かったと思っています。学力はうんと上がって、4・5年のころに欠けていた部分をていねいに教えてもらえたからです。このことによって、ついにドロ沼のスランプからぬけ出すことができたのです。

中略

ところで四進では、自分の学力が志望校に合うかどうかを確かめる3つの大きなテストがあります。これは志望校の目安をつける重要なテストですから、先生はこの試験に特に"熱"を入れているようでした。

「3回の試験の内、2回分は確実にとれ!! 1回分落としてもいいから」と先生が1回目の試験の前日におっしゃいました。

試験が終わった時は、はっきり言って自信がありました。試験から一週間ほどして、来た通知を見ると14,000人余りの中で750位の成績でした。2回目も761位だったので、先生は「3回目は気楽にやっこい。でもだからといって遊んできちゃだめだぞ」と言われて何日もたたないたたないうち、3回目の試験の前々日から頭痛が続きました。それでも学校は早退せずに、そのかわりに塾を休むことにしました。何しろ学校はこの6年間一度も休んだことがないのですから。

「夜は、9時までには必ず寝ること。それと頭が正常な状態にもどるのは、起きてから約3.5時間かかる。睡眠が第一だ。まず寝ること」2月1日のC中の受験の日の一週間前から先生がしきりに言い始めたのがこの言葉でした。

さて試験当日は、「やるだけやってくれば、結果はどうであろうといいから。自分で続けたんだから、一生懸命やってたとえ駄目だったとしても仕方がない。それじゃ頑張ってこい」と一言いしました。

C中学に受験者5人がそろると、塾の社会科担当の先生がお守りとして小さな"マスコット人形"をくれました。算数は3問中2問ほどできたつもりでしたが自信はありませんでした。と思ったとおり、やはり残念な結果に終わってしまいました。

また、たまたま一次試験(抽選)に受かった筑波大学附属駒場中学校(下線は引用者)も、C中に全力投球したために、全く対策ができていませんでしたから、落ちてしまいました。

C中には5人の内1人だけが合格しました。中学受験には失敗しましたが、ここでつけた基礎学力を、高校受験に役立て、今度こそ合格したいと思います。

筑波大附属駒場中学の現在の入学生は、小学校の3~4年生から例外なくこうした経験を積み重ねてきている。「勝ち組」だから、なおさら「効率主義」「点数主義」「徹底した競争原理・信仰」「自己中心性」「選別・淘汰をあたりまえの原理として受容する」等を親子共々プリンティングされて、送り込まれてくる。共通することは、きちんとした文章は書くが、自分を客観視できないことであり、自己洞察力を欠くことである。

筆者は、本校に勤務して16年になるが「塾の看板生徒が入学してくる」「少子化時代を迎えてもトップ校をめぐる熾烈な受験競争は不変」という実態は、この10

数年間大きく変化はしていない。

脳科学者の澤口俊之は、幼少時に「豊かな社会関係に囲まれた普通の環境」で育ってこなかった子どもの問題について論じている。<sup>(7)</sup> PQ (PrefrontalQuotient) とよばれる知性に焦点を当て、IQ (知能) やEQ (感情的知性) はもちろん大事ではあるが、これまでの日本の教育に決定的に欠けていたものが、PQ教育であると主張する。

本校に入学してくる子どもたちの保護者は、我が子の中学受験をにらんで小学校の3～4年生位から進学塾通いをさせるが、それ以前は、公文式とスイミングというのが一般的である。複数の母親達の証言と、先頃の『AERA』(朝日新聞社)<sup>(8)</sup>の連載記事とが一致する。気になるのは、澤口の言う「(家族や地域などを中心とした)関係豊かな社会関係に囲まれた普通の環境」(( )内は筆者)を重視することよりも、塾・スイミング・音楽教室等への外注が目立つことである。これらは、澤口が主張する「普通の環境」ではない。

ところで、本校で何年間にわたって実施した調査によると、塾の成績と入学試験の成績はかなり強い相関関係があるが、入学試験の成績と入学後の学校の成績には必ずしも相関関係が認められない。入学後の成績は学年が進むにつれて少しずつ変動はするが、中学1年時と高校2年時の成績には強い相関がある。もちろん、大学の入試結果と本校に在籍中の成績には強い相関があるから、小学校時代の塾の成績は必ずしも大学の進学実績にはストレートにはつながらないということが分かる。

これに対するある進学塾幹部の説明は、「入学試験では、反復の成果が確実に出る。だから、徹底したスキルトレーニングがものをいいますよ。一つの疑問に、じっくりつきあったり、考えさせたり、…ということが正直欠けているから、筑駒のような授業では、塾のトップが必ずしもトップに立てるとは思わない。」である。<sup>(9)</sup>

この答えで思い出したのは、筆者が中学の3年間と高校3年時に、数学を教えたS君の「先生、中学受験のための塾では5～6年生の授業で、同じことを3回も4回繰り返し、テストで強化していく。問題を見て、『これはあのパターン』『こうすれば解けるはず』というぐあいに頭が自然に動き出す。理科の時間で習った『パブロフの条件反射』のようなものですよ」という言葉である。

中内敏夫は「日本では、要素的な知識観・学力観」

が強いことを指摘した<sup>(10)</sup>が、中学や高校の受験勉強の弊害を言い当てた指摘である。知識を、個々の事柄を知る(記憶する)ことと捉え、それをたくさん持つ(記憶する)ことで、学力の高さを測る。受験の世界では、これがまかりとおる。

「自分の意志ではなく、過度の、しかも早い時期から塾通いをし、こうした指導を繰り返す」ことによって、「点数序列による人間(自分と他者)の価値付け」をあたりまえのこととして受け止め、優越感と劣等感を背中合わせにしながら生きてきている。<sup>(11)</sup>「遊び友達とのつきあい」「放課後のさまざまな活動」など、必要な経験を切りつめてこの数年間を送ってきたことの弊害、「身につけられなかったこと」「失ったもの」もかなり多いことが推定される。だから、母親との2人3脚あるいは父親も巻き込んだ3人4脚の協力体制をどう崩すかが、中学生の重要な課題になる。これは、冒頭で論じた「自分くずし・自分づくり」の第一の転換点、「自分くずし」をどう仕掛けるという問題でもある。

中学校と高校の卒業文集(2つの人生観)の比較から

次に紹介する2つの文章は、本校で6年間を過ごしたT・Y君(以下、Y君)が、中3と高3のそれぞれ卒業文集の中で語っているものである。熾烈な受験競争に真面目に取り組み、勝ち抜いてきた本校の生徒たちが中学時代をどう過ごし、高校時代に何を考えながら、6年間「自分くずし・自分づくり」に取り組んできたかが、かなりハッキリと表れているとケースだと思う。中高の教師を長年やってきて、彼らの育ちを推測することはできても、このようにハッキリとした変化はなかなか目に見えない。そういう意味では、貴重な同一人物の「生き方観」についての作文である。

太田堯は、「戦前・戦後を通じて、学校教育制度の中にとりこまれた日本の子どもや若ものたちにとっての、ほとんど決定的ともいえるべき不幸は、一人ひとりの内面からの『どう生きるか』の問いを奪われ続けてきたことだ」と述べる。<sup>(12)</sup> 後で紹介する『暗転中の独り言』という文章が、Y君自身から筆者に届けられ、一読したときに思い出したのが太田堯のこの一文である。

## 今後の生き方

一楽(らく)して生きるとは一

中学校 3A T・Y

題名は堅いが、別に内容はまじめなものではない。要するに、僕が3年間筑駒で生活してきて考えた生き

方について、ここでは書きたい。

筑駒で3年間いろいろなことを学んだが、その中に「いかに楽をして成果を出すか」という生き方もある。もともと僕が中1の時は何事も努力しすぎるほど努力していたような気がする。だが、今になって考えると、それは愚かであった。今の僕は「いかに楽をするか」を考えて行動しているが、この生き方もなかなか悪くはない。

「楽をする」生き方のよい点を挙げてみる。第一の長所は疲れないことである。疲れないことにより、自分が本当にやりたいことに備えてエネルギーを蓄えておける。この実例がおととしの2Bの文化祭である。2Bは、授業中に寝ている人、しゃべっている人が全体の4分の3はいた。僕たちに言わせてみれば、それは省エネということである。興味のないことに力はかけない。だが、省エネした文のエネルギーを興味のあること、ここでは文化祭で発散して、2Bは3つの賞を取った。

これは、なぜA組が3年間賞（文化祭）に恵まれなかったかということの答えになっている。（筆者注：ちなみに、筆者は賞に恵まれなかったA組の担任である）A組には真面目な人ばかりが集まりすぎる。授業中まじめすぎることで、文化祭にエネルギーが行かなかったのだ。だから、 $1+1=1.5$ になってしまう。<sup>(13)</sup>授業の中で、興味のないことを適当にやることを知っていれば、つまり「楽をする」ことを知っていれば、 $1+1=1.5$ なんてさみしいことはなく、 $1+1=3$ くらいにはなっただろう。

つまり、「楽に生きる」ためには、エネルギーの配分が考えられねばならない。「どこにエネルギーを最も使うべきか」は、訓練によって身につく。僕は、2年間B組にいたが、効率のよいエネルギーの配分の仕方は、この2年間で学んだ。B組には、「授業・掃除はそこそこ、行事は頑張る」という風潮があった。

実はこの生き方、期末試験にも使える。つまり、「勉強をあまりせずに、いかにいい点を取るか」である。僕は、出そうな所を見極めて、そこだけをまとめることにして楽をしているが、中には他人の作ったノートを見て楽をする人もいる。まあ、どちらの場合も「楽をする」ことには代わりがないが、どのくらいのエネルギーを使うか（人によって異なる）が、結局成績を決めている。

どの生き方もそうだが、この生き方にも欠点がある。この生き方の重要なところは、楽をしても、その楽をした分を使って興味のあることをして大きな成果を出

してこそ意味があるところである。だから何事にも興味のない人、つまり世捨て人や、エネルギーの配分が下手な人がこれをやると、全部楽をするだけで何もやらずに、人生を棒に振ることになってしまう。僕が2Bから3Aに来たとき、みんな授業中まじめすぎると感じた。僕の生き方には合わないクラスだと思った。その証拠として、僕の期末の点だって、授業態度の悪かった去年の方がよっぽど良かったし、文化祭だってよっぽど去年の方が打ちこめた。そして、楽しかった。A組のまじめな風潮に乗ってしまい、授業中省エネでできなかったからだと僕は思う。

本当はもっと書きたいが、残りあと少しなのでまとめに入る。外見から僕を見て、掃除は年に5~6回しかしてないし、授業中は寝るし、遅刻はするしで、なんて怠慢な奴だと思っている人もいるし、部活に出なかったからってうるさい奴もいる。でも、僕は気にしない。3学期（注、卒業文集の原稿提出は冬休み明けであった）は、そして高校に行っても「楽しんで成果を出す生き方」をしていき、極めるつもりだ。（下線は引用者）

そもそも、部活に出なかったのだから省エネのためだ。僕は中途半端が嫌いだから、部活に回していたエネルギーを麻雀に回して、思う存分やったのだ。このやり方の何が悪い。すべてを同時にやれる奴なんかいやしない。同時に全部やって中途半端よりも、一個ずつ全力でやって完璧の方がいい、と僕は思う。将来、たくさんの別のことを専門にする人よりも、一つが専門の人が多し。それまでにエネルギーを節約しておいて、一気に放出する（一つの事に）ことで、大きな成功が得られるのだと思う。（下線は引用者）

これは挑戦だ。今まで僕を怠慢と言ったり、部活に出るとうるさかった奴への挑戦だ。必ずや、楽をして大きな成果を得る生き方、つまり、省エネによる生き方で、大きな成功をしてみせる。授業中まじめで寝たことこともないような奴を、驚かしてみせる。

高校では、将来へ向け、どの分野にエネルギーを最も使うか、を見極めるために、数多くの経験を積み、そして省エネ、つまり息抜きも忘れないようにして、有意義な生活を送りたいと思う。「楽をして、成果を出す生き方」を極めるために。

彼は、本校でよく見かける典型的な成績優秀で真面目な中学生である。（少なくとも、担任であった筆者の目にはそう映っていた。）彼が描いている「授業中寝る」「遅刻はする」「清掃をさぼる」「麻雀にうつつを抜か

す」…という世界は、担任からみて、必ずしも彼のホンネの部分や実態ではないようには思うが、精一杯突っ張って「俺は、決していい子なんかじゃないぞ」「俺は、親や教師の思うとおりににはならないぞ」と斜めに構えた姿勢・ある種の決意が見て取れる。当然、親との葛藤も相当なものであったことが予測できる。

冒頭で紹介した竹内は、これを「仮の自分を構える」ことで、親の世界から訣別、青年期遍歴に旅立つ「姿（形?）」であると表現する。

彼に限らず、本校でこうした例は珍しいケースではない。筆者は、筑波大附属駒場に赴任する前に、横浜・東京の公立中学校に16年間在籍していたが、中学3年―高校3年の間に入試という壁を挟んでいるときには、中3から高1にかけて起こるこうした「模索＝自分探し」の営みは見えなかった。教師も、親も、生徒も、何とか高校に合格させる（する）ことが至上命題であったから…。受験という世界は、点数と序列がすべてであって、太田堯の言う「どう生きるか?」という問い（12）や教師の「この子にとって、何が本当に必要なことであるのか?」という問いを、合格という目的やそのための作業の中に閉じこめてしまう。(14)

言いかえれば、中学生・高校生の時代に「とりあえず高校や大学に入る」といった当面の課題をクリアすることに時間が費やされ、「どう生きるか?」の問いを先送りしている中高生が多いということになる。

Y君の文章や筆者の教師経験から、次のように整理ができそうだ。中学校の3年間では、中学受験の「勝ち組」が往々にして持つ客観性を欠いた自己中心的な主張が容易には消えないし（10年ほど前の生徒であれば、中学3年で大方「自分くずし」が終わり、高校1年で「自分探し・自分づくり」が始まると考えていたが、この6～7年はこの時期が1～2年ずれ込んでいるのではないか?と思う。）、まして、高校受験を控えた一般の中学生では、なおさら「自分くずし」が難しいということになる。さらに、小学校時代の親子関係の絆が強ければ強いほど、そして、ダブルスクール期間が長ければ長いほど、それが習慣化・日常化されるがために、その構えは崩れにくい。竹内の言葉を借りれば、容易に「仮の自分を構える」ことができないことになる。

Y君の文章から、「仮の自分を構える」ということが、どんな心情やいかなる行動をともしながら表れてくるのかが、見てとれる。小6のT君の文章との比較から、おそらく、小学校時代と中学校時代の学習や生活のギャップが、「自分がこれまであたりまえだと受け止

めてきた学習や生活に疑いをもち始める」ことが、第一の転換点であり、「自分くずし」の誘発剤になる。

高校から本校に入学してきた生徒が崩れるケースを見ていると、中学時代に自分を押し殺しながら勉強に励んできた生徒が多い。「自分くずし」のきっかけを、高校受験に打ち込むこむことによって、自らの意志で封じ込めてきたからである。「自分くずし（反抗や逸脱・内閉）」をマイナスの行為としか見ない親や教師のサポートも、彼らの「自分くずし」（「自分づくり」）のきっかけを見失わせてしまう。

これは、保護者会などで筆者がよく使う一文だが、中・高生、一人ひとりの成長曲線について見ると、大人（親や教師）の期待直線は、右上がりの単純増加直線であるが、実際の成長曲線はデコボコ・ジグザクの不規則な折れ線である。親の期待通りには成らない。また、この曲線は、個人の抱える事情・資質・親子関係によっていかようにも変化する。「子どもの自分くずし・自分づくり」の作業は、子ども自身が担うべき営みであって、大人の役割はこれをどうサポートするか（できるか）になる。ここでは、子どもとの距離のとり方・向き合い方が問われる。

「親子関係のつくり直し」「効率主義や点数主義、競争信仰からの離脱（考えること・分かることのたのしさ・おもしろさを知る）」「他者との連携・共同することの意味・意義の獲得」「彼らの『反抗と依存』の上手につきあいながら、『自分づくり』に向かわせる」の、大きく4つの課題が本校の中学生の共通のテーマとしてある。生徒だけを相手にしてもうまくはいかない。子どもだけでなく親たちに、何を語るか、語れるかが鍵をにぎるように思うがどうだろう。

Y君とは、彼らの高校進学と同時に、筆者が中学校の副校長になったこともあって、2年間はまったくつきあいがなかった。その彼を、筆者は3年ぶりに選択数学の授業（数学C）で担当した。12月の特別授業（集中講座）の後で、部屋に戻ろうとする筆者を捕まえて、渡されたのが以下の文章である。「卒業文集に掲載予定の原稿ですが、中3の時に書いたものと180度違います。先生に、ぜひ読んでいただきたいと思って…」という言葉が添えられて…。これは、明らかに、第二の転換点をくぐり抜け「自分づくり」がはっきり示されている文章である。

## 暗転中の独り言

高等学校 3-4 T・Y

「人生とは、演劇に似ているとよくいわれます。我々は、一旦幕が上がったら最後、幕が下りるまで何があっても演じ続けなければなりません。たとえ、途中で役が変わったとしても…。」

これは、世にも奇妙な物語、のある話の冒頭である。この話は、僕が見たホラー史上、一、二を争う怖さなのだが、別にこの話について語るつもりはない。僕が目にしたのは、「人生は演劇に似ている」の部分である。

よくありがちな例だ。人生というものは、旅、道、マラソン、その他多くのものに例えられている。演劇だって、その中の一つの例に過ぎないが、高校三年間演劇をやり続けた僕にとって、この例は重い。

人は生まれ、生まれた時から自分の中で「自分が主人公の劇」が始まる。はじめの観客は親だけかもしれない。それを言うならば、登場人物も自分と親だけだろう。その後、成長し、幕が進んでいくに従って観客は増え、登場人物も増え始める…。ここで大切なのは、人生、全ての登場人物は同時に観客であることだ。自分の人生を共に練り上げてくれる周りの人々に自分は常に見られている。これは相当なプレッシャーだ。下手な演技をすれば、登場人物の自分に対する接し方は当然変わってしまう。人生、自分だけのことを考えればいいわけではない一つの理由だ。

幕が進んでいくと、舞台から去る人が出てくる。それは地理的な別れかもしれないし、あるいは永遠の別離、死、かもしれない。(10)主人公たる自分はその別れを当然悲しむ。が、しかし、自分が悲しみに浸れる時間は少ない。観客は必要以上に長い悲しみの時間にはブーイングをおくるからだ。幾多の悲しみに会い、しかし、気丈に前を見て生きていかねばならぬ人生の一面だ。

幕が進み、当然いいこともあるだろう。しかし、この場合もさっきと同じだ。必要以上の喜びは許されず、自分はまた、何が起こるかかわからぬ未来へ進んでいかねばならない。

こう考えてくると、演劇と人生の最大の違いは、台本がないことだろう。演劇は、観客は次に何が起こるかかわからないが、役者の方はわかっている。しかし、人生はどうだろう。自分だって、未来に何が起こるかかわからない。そして、どんなことが起ころうとも、与えられた役を演じ続けなければならぬのだ。

こう考えてくると、人生とは何と厳しいものだろうと思える。しかし、それだけではないはずだ。台本が

ないことは、言い方を帰ればチャンスともとれる。自分の努力しただけで、違った未来を作ることができるからだ。単調でない日々を送ることができるのも、台本がないからだろう。

演じていて、ふと思う。今個々にたっているのは誰のおかげか、と。芸術としてみた演劇の9割を作るのはスタッフ、つまり裏方たちであるといわれる。人生も同じではないだろうか。自分が何気なく生き、寝て、遊んで、学んでいる時、必ず見えぬところで自分を支えてくれている人がいるはずだ。自分がどんな人生を送っているのか、ほとんど見ることはできないのに、支えてくれている人がいる。観客に自分の姿を見せることができないのに、支えてくれる人がいる。僕は感謝の念と共に、一種の責任を感じざるをえない。人生、自分のことだけを考えていけばいいわけではない二つ目の、そして大きな理由だ。挫折した時、舞台から逃げたくなった時、陰で支えてくれる人のことを考えると、決意がみなぎってくる。大切なのは、うまい演技ができるか、ではない。いかに、精一杯努力するかだ。どんな苦難にぶつかっても、挑戦し続けなければならない。楽に生きよう、省エネしよう、とすることは、支えとなってくれている人に対する裏切りだ。確かに、裏方の人達に対し、直接に恩返しすることはできない。しかし、だからこそ、そういう人たちに見られて恥ずかしくない人生を送らねばならないのだ。

幕を下ろすとき、自分は胸を張って、支えてくれた人々に対し恥ずかしくない人生を送った、といえるようにしたい。自分が、私が、満足できたか、ということよりも、周りの人々が、公が、幕が下りた後も語り継いでくれるような、そんな演劇を演じたい。それが楽な道ではないことはわかっているが、初公演で解散しなければならない(10)、そんな運命、ただ一度の人生だからこそ、それくらいのことはいたい。

新たな幕が始まろうとしている。今は暗転中で、次の幕、どんな人と共演するのかもまだわからない。ものすごく不安だが、これだけはいえる。何があっても、僕はこの6年間の幕で共演してきた、多くの役者達のことを、決して忘れはしない。

この文章を読み終えたとき、素直に（というか、不覚にも）「教師を続けてきて良かった」「こうした手応えを求め続けていた」という、涙がこぼれそうな感慨を持った。同時に、「自分くずし・自分づくり」の作業には、相当の時間がかかることをあらためて感じた。もちろん、このこと自体は、筆者の教師生活30数年の



中で、そんなにたくさん経験できたことではない。

高3時のY君の

「自分が何気なく生き、寝て、遊んで、学んでいる時、必ず見えぬところで自分を支えてくれている人がいるはずだ。自分がどんな人生を送っているのか、ほとんど見ることはできないのに、支えてくれている人がいる。観客に自分の姿を見せることができないのに、支えてくれる人がいる。『楽に生きよう、省エネしよう、とすることは、支えとなってくれている人に対する裏切りだ。確かに、裏方の人達に対し、直接に恩返しすることはできない。しかし、だからこそ、そういう人たちに見られて恥ずかしくない人生を送らねばならないのだ』と

中3時の「外見から僕を見て、掃除は年に5～6回しかしてないし、授業中は寝るし、遅刻はするしで、なんて怠慢な奴だと思っている人もいるし、部活に出なかったからってうるさい奴もいる。でも、僕は気にしない。3学期（注、卒業文集の原稿提出は冬休み明けであった）は、そして高校に行っても『楽しんで成果を出す生き方』をしていき、極めるつもりだ」「同時に全部やって中途半端よりも、一個ずつ全力でやって完璧の方がいい、と僕は思う。将来、たくさんの別のことを専門にする人よりも、一つが専門の人が多い。それまでにエネルギーを節約しておいて、一気に放出する（一つの事に）ことで、大きな成功が得られるのだと思う」

（下線は、いずれも引用者）

の間のドラマティックな変化は、何をきっかけとして起こるのか、どのような条件・要因が重ね合わされることよって可能になるのか、そのメカニズムや背景・条件を是非とも解明してみたい。幸いなことに、つい先日、彼は自治医科大学への進学（おそらく、少し頑張れば東大や慶応の医学部にも受かる力を持っていると思うのだが、自治医科大学＝僻地や無医村の医師になるための大学への、進学を決めた。）が決まり、彼自身の話をじっくり聴くことができた。両親は、中学3年生の「仮の自分を構えていた」彼の姿をどのように見ていたのかについても聴いてみた。

実は、Y君が中3の卒業文集を書いた後の3学期に、ちょっとした事件があった。弁論大会のクラス弁論の内容をめぐって、担任であった筆者も中に入って論争があった。この事件については、別なところで書いたことがある。<sup>(18)</sup>弁論の作成委員であったY君を「事前のホームルーム討議を無視して、当日の弁論が作り替えられた」ことで、筆者が叱りつけたことがあった。

この後、1ヶ月ほど学級日誌の中でホットな論争が展開された。これは筆者にとっても、久々に緊張した出来事だったし、非常におもしろかった。生徒たちも必死に考えた。

Y君は、高1の中頃から卓球部の活動に復帰し、音楽祭・文化祭にも熱心に取り組みはじめる。高2からは、早朝、学校のマラソンコースをひとり黙々と走り始める。彼からの聴き取りで分かったことだが、中3の卓球部の最後の公式試合が終わってからの6ヶ月間、自分の生活を支えていた卓球部の活動に身が入らなくなった。遅刻をしたり、掃除をさぼったり、卓球部の連中と麻雀に夢中になったりしたのもこの頃であるとのこと。2月末（クラスで論争があった後）頃から、帰宅後、家の周辺で走り始める。また、高1から新たに加わった仲間達に、大いに刺激もされたらしい。高1の夏以降、卓球部の部長をまかされ、学年の仲間や後輩のことも考える必要が出てきたことが、自分のスタンスを変えたと、語ってくれた。また、両親は中学3年時の行動をはらはらしながら見ていたそうだが、「あなたの人生は、あなたが決めなさい」という態度は首尾一貫していて、彼にとっては「非常にありがたかった」とのことである。

この時期に、中3の3学期の出来事を記した『教育』の拙稿「いつでもどこでも学級崩壊はおこる」<sup>(17)</sup>のコピーを渡したことがある。高2の終わり頃までは、大学で数学を専攻したいと考えていたようだが、高3になって、医学部進学を目標に決めた。高3時、筆者が担当した選択科目：数学Cの授業態度も非常に積極的で真面目であったし、成績も申し分のないものであった。

「新しい友達との出会い」「部長という責任を背負わされたこと」「芝居作りを通じて、時に主役やリーダーとして、ある時はフォロワーとして、チームワークの大切さを学んだこと」などいくつかの経験を重ねながら第二の転換点を経て、「自分づくり」「将来の仕事の選択」という作業を進行させたことが、彼の文章からうかがえる。

先述した太田堯は、同じ論稿の中で「どう生きるか」の問いは、次の2つの問いから成り立っているのではないかと説く。<sup>(12)</sup>

- 1) 自分の持ち味は何か。
- 2) それを、社会のどのような仕事を通じて生かすのか。

附属駒場では、毎年の大学進学実績はあまり問題に

はならない。授業・行事などでどれだけ、活躍できるか、後輩達に対する影響力をどれだけ持ちえたか、各学年の雰囲気やリーダーシップやチームワーク等の方が、問題視される。こうした「学校文化」とそれを支える「ヒドゥンカリキュラム」がある。

おそらく、ジグザグ・デコボコの6年間の生活を経て、今後の進路目標が定まり、11月に行われた高3生の文化祭で高校生活を思う存分燃焼し尽くし、受験勉強への転換もスムーズに進んだからこそ、スッキリした気分で「卒業文集の原稿」のコピーを筆者に渡す気になってくれたのだと思う。

### まとめと考察

3つの作文を通して見えてきたことを、思いつくまに拾い出してみよう。

- ・中高生のアイデンティティ形成が、年々容易ならざるものになっていること
- ・成績がトップの生徒であれば、なおさらこの作業が難しくなること
- ・中内が指摘する「要素的な知識観・学力観」を早期に崩す必要があること
- ・中学時代のクラスや教科担任の役割が非常に重要であり、Wスクール状態を引きずっている子どもたちの「自分くずし・自分づくり」は、容易ではないこと
- ・「自分くずし・自分づくり」には、おとな（親や教師）が考えている以上に、時間がかかることであり、ジグザグ・デコボコの過程であること
- ・とくに中学校では、子ども以上に保護者である母親・父親に対する教師の働きかけ（親子関係のづくり直しの要請）が重要であること
- ・社会力・コミュニケーション能力や自我の形成が（受験）学力形成より大事な作業であり、難しいこと（受験学力の形成は、学校でなくとも可能である）
- ・竹内の言う「自分くずし・自分づくり」の過程には、2つの転換点があること
- ・また、その作業には「仮の自分を構える」段階を含むこと
- ・教師が、時に、子どもたちあるいは子ども個人を追いつめる必要があること

中等教育学校が、昨年来、全国のあちこちに開校した。また、中高一貫システムを標榜する中高一貫の私立進学校は多い。しかし、多くの進学校は、週6日制を維持しながら、「先取り主義」「文系・理系に早くか

ら分けるコース主義」「能力別学級編成」を自校のセールスポイントとして、有名大学受験・合格に照準を合わせる。進学塾と同じ戦略を採りながら、学校によっては塾の指導・助言を受け、「親（消費者）のニーズ」に応える教育・授業スタイルを必死に模索しながら、教育が進められる。

筆者は、4年前に副校長に就任して以来、仕事柄、多くの進学塾関係者や私学や公立校の関係者と話す機会を持つようになった。しかし、彼らからこれまで述べてきたような中高生の「自分くずし・自分づくり」について、およそ聞いたことがない。いまだに、中学校や大学の進学実績が、塾や私学のみならず進学校と呼ばれる学校の最も大事なセールスポイントになっていることを、裏づけるものだ。公立校にも同種の問題がある。10数年前に、全国のあちこちに「理数科」「特進科」が公立トップ高に設置された。受験教科である英語や数学の時間数が上乘せされ、普通科クラスとは別のメニューが用意される。大学の進学実績を上げるための県教委の教育政策の目玉でもあった。いわゆる「学力向上プラン」である。しかし、筆者の聞き取りや実感では、これが現在うまく回っているとは思えない。表面化してはいないが、「理数科」進学者の不適応が相当数あるからだ。筆者の勤務校の中学3年生（14～5歳）を見ても、自分の適性を判断し将来への見通しをたてる力が備わっているとは思えない。本稿で見えてきたように、中学3年生は「自分くずし」のまっただ中にある。成績が他者よりいいことで、教師や親の後押しをうけて、「理数科」「特進科」に進学してくるといのが実態である。

本校は、「先取り主義」「コース主義」「能力別編成」を、いっさい採用しない。それよりも、「中学・高校時代にやるべきこと」「やらなければ取り戻せないこと」「共同・連携の大事さを知ること」「自分で判断し、選択し、努力させることが大事」など、たくさんあると考えているからだ。

本論の最初で、中学受験の「勝ち組」が、失うべく経験を通して失ってきたことについて、澤口の指摘を引用しながら取り上げたが、門脇厚司が論じた「社会力」(18)も、この失ってきたという子育てしていないものの一つである。門脇は、評論家の佐高信との対談の中で、「社会力」のおおもとになっているのが、人間への強烈な関心であり、人が好きだという感情であり、人間に対する信頼感であると述べるが、まったくその通りである。

筆者は、中・高で数学を担当するが、中学1年生の

授業を担当するときに心がけてきたことの一つに、「『証明』が『人を説得するための技法』である」ことを、彼らにどう納得させるかがあった。「キレル」「荒れる」「すぐ、あきらめる」子どもたちの問題は、こうした説明技法の獲得と無関係ではない。「自分の意志を相手に伝え、相手の意をくみ取る」スキルトレーニングと数学の授業が結びつく例だ。

効率主義や競争・淘汰の原理が渦まく学校生活の中では、自分をじっくり見つめ、「自分くずし・自分づくり」の作業にじっくり取り組むことはできない。

昨秋からの筑波大学の「附属学校検討委員会」の最終報告書で、本校は「中・高・大・院の共同・連携で、エリート形成に取り組む」ことを謳った。それに引き続いて、今年度の「附属学校改革推進委員会」では、戦後の日本社会では、タブー視されてきた中等教育段階の「リーダー養成／エリート形成」の問題に、筑波大学と附属駒場中高の共同で取り組むことを明記した。21世紀の日本や世界を支え、人類が直面するさまざまな地球的課題やその解決に、自由闊達に、果敢に「挑戦し、創造し、貢献する」(附属駒場の学校目標) トップリーダーの形成を、「高大連携」ですすめる。その具体的な取り組みの第1段階としてとして、文部科学省が昨夏立ち上げた「スーパーサイエンスハイスクール」(研究開発)に応募し、その指定を受けた。

これをすすめていく際に、筆者が大事だと考えていることは「自分を客観視できる」「他者理解」「社会貢献」「善悪の判断」「モラルの形成」などを、現在検討中の中高一貫カリキュラム<sup>(10)</sup>の中にどう組み込むかである。学校としては、これまでもこのことを常に考え、これがいかなる方法によって可能になるかを、教職員がともに考え、試行錯誤を繰り返しながら実践を重ねてきたことだけは、自信を持って断言できる。我田引水だが、こうした実践の積み重ねの中から、Y君の2つの文章が生み出されたと考えているがどうだろう。忌憚のないご意見・ご批判をお願いしたい。

\* 本稿は、2002年3月の筑波大学教育学会、同年7月の日本カリキュラム学会(九州大学)での発表原稿に、加筆・修正を加えたものである。

引用・参考文献

- (1)竹内常一『子どもの自分くずし、その後』太郎次郎社・1998年(本稿のキーワードである「自分くずし・自分づくり」については、竹内の『子どもの自分くずし・自分づくり』東京大学出版会1987年で見事に展開されている。)
- (2)川崎市にある進学塾アクセスから提供された資料によると、首都圏一都三県(神奈川・埼玉・千葉)の中学受験率(受験者数÷卒業生数)は、99年は12.7%、00年は13.0%に伸びている。
- (3)筑波大学学校教育部メンタルヘルス研究
- (4)文部科学省「国立の教員養成系大学・学部の在り方に関する懇談会」の討議資料(H. Pによる。報告書『今後の国立の教員養成系大学・学部の在り方について』は平成13年11月22日に出た。)  
井上正允稿「『もう一つのエリート校』宣言」(『中央公論』2001年12月号)
- (5)都区内の小学校の教師の市川良が、1988年の全国進路指導研究会の夏の大会で発表した「小学生の中学受験と進学塾通いの問題」からの引用
- (6)東京の私立中・高の麻布・開成・武蔵の3校を「御三家」と呼ぶ。
- (7)澤口俊之『幼児教育と脳』文芸春秋・平成11年(澤口の論ずる対象は、幼少年期—小学校の2~3年生までだが、本文でも述べたように、本校生徒の少なくとも2桁は進学塾入塾前に公文式やスイミングの経験をしてきている。)
- (8)『AERA』の連載「公立校VS私立校」朝日新聞社(2000~2001年)
- (9)日能研中学入試情報センター松浦三郎氏からの聴き取りによる
- (10)中内敏夫著作集I『「教室」をひらく—新・教育原論』藤原書店・2000年
- (11)太田堯『教育とは何かを問い続けて』岩波新書1986年
- (12)太田堯稿「<学校信仰>を考える」(『世界』1989.5岩波書店)
- (13)「 $1 + 1 = 1.5$ であれば共同した意味がある」とは、筆者がクラス担任として3年間言い続けたことである。中学1年の段階では、各人が持っている能力を最大1と仮定したときに、2人が共同することによって、1より大きな結果が残せれば、共同した意味があったことになる。小学校では、行事などが切りつめられ共同体験が少なくなって、何も手を入れないでいると、 $1 + 1 = 0.7$ というケースもでてくる。つまり、「他人との共同する」トレーニングを積んできていないがために、一人で仕上げた方がいい結果ができることが、おうおうにしてある。おそらく、「中高生の引きこもり・閉じこもり」もこのことと無関係ではない。コミュニケーション人間関係の煩わしさを避け、一人作業の方がいいと考える中高生は多いはずだ。
- (14)井上正允稿「中・高一貫教育を内と外の経験をとおして考える」(『教育』1989.5国土社;この稿の冒頭で、筆者が公立中学校で担任したひとりの男子の「3年間を振り返って」という文章を紹介した。やりたいことを全て封じ込めて、彼が過ごした中学校生活が描かれている。)
- (15)推測だが、高3の1学期末に中学から一緒に校外学習や音楽祭などの行事に取り組んできたA君が亡くなったことが、こうした表現に結びついている。
- (16)T. Y君は高3の秋の文化祭で演劇班の中心メンバーだった。文化祭の3日間が終われば演劇班も解散する。
- (17)井上正允稿「いつでもどこでも学級崩壊はおこる」(『教育』1999年3月号 国土社)(この中で、筆者とT. Y君との確執およびクラス討議を紹介しながら、表記のタイトルで、この3年間、学年担任として取り組んだ出来事について論じた。)
- (18)門脇厚司・佐高信『<大人>の条件—「社会力」を問う—』岩波書店・2001年、「社会力」という用語については、門脇『子どもの社会力』岩波書店・1999年を参照)
- (19)筑波大学附属駒場中・高等学校「中・高一貫校のカリキュラム構成に関する基礎的研究—総集編—」(2001.6)